

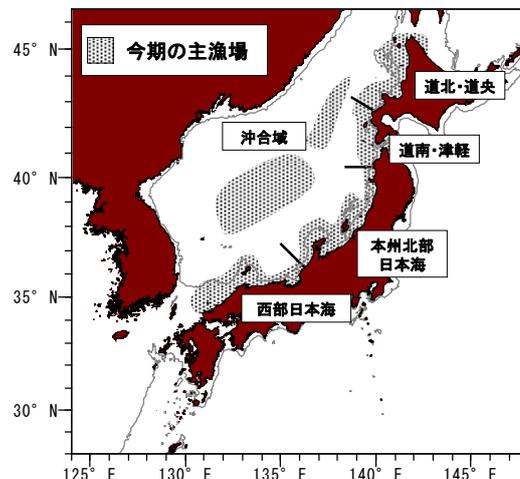
## 平成23年度 第2回 日本海スルメイカ長期漁況予報

— 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター  
日本海区水産研究所がとりまとめた結果 —

### 今後の見通し(平成23年8月~12月)のポイント

対象魚種：スルメイカ  
対象海域：日本海  
対象漁業：主にいか釣り・小型いか釣り漁業  
対象魚群：主に秋季発生系群

- (1) 来遊量：昨年を上回り、近年平均並み。
- (2) 漁期・漁場：8月までは昨年および近年平均を下回る。
- (3) 魚体の大きさ：小さい。



\* 近年は最近5年間(平成18年~22年)

### 問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課

担当：沿岸資源班 新村、内海

電話：03-3502-8111(内線6800)、直通電話：03-6744-2377、ファックス：03-3592-0759

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.jfa.maff.go.jp/j/press/>

(予報の詳細についてのお問い合わせ先)

独立行政法人水産総合研究センター 日本海区水産研究所 業務推進部

担当：関根、中島

電話：025-228-0451、ファックス：025-224-0950

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://jsnfri.fra.affrc.go.jp/>

## 平成23年度 第2回 日本海スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（平成23年8月～12月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：日本海（道北・道央、道南・津軽、本州北部日本海、西部日本海、沖合域）

対象漁業：主にいか釣り・小型いか釣り漁業

対象魚群：秋季発生系群、後半は冬季発生系群も含む

### 1. 道北・道央（小型いか釣り）

- (1) 来遊量・漁況：昨年を上回り、近年平均並み。
- (2) 漁期・漁場：8月までは昨年および近年平均を下回る。
- (3) 魚体の大きさ：小さい。

### 2. 道南・津軽（小型いか釣り）

- (1) 来遊量・漁況：昨年並みで、近年平均を下回る。
- (2) 漁期・漁場：8月までは昨年および近年平均を下回る。  
11月～12月にも漁期のピーク。
- (3) 魚体の大きさ：小さい。

### 3. 本州北部日本海（小型いか釣り）

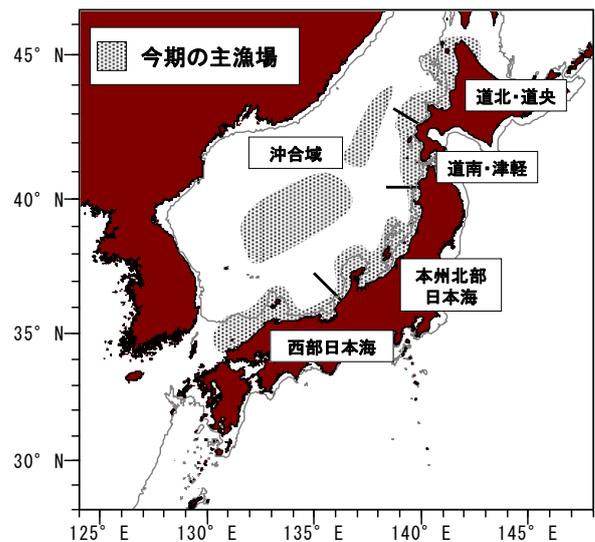
- (1) 来遊量・漁況：昨年および近年平均並み。
- (2) 漁期・漁場：活発な漁場形成はない。
- (3) 魚体の大きさ：小さい。

### 4. 西部日本海（小型いか釣り）

- (1) 来遊量・漁況：昨年を上回り、近年平均並み。
- (2) 漁期・漁場：10月までは昨年および近年平均を下回る。
- (3) 魚体の大きさ：小さい。

### 5. 沖合域（いか釣り）

- (1) 来遊量・漁況：昨年を上回り、近年平均並み。
- (2) 漁期・漁場：主に9月以降。
- (3) 魚体の大きさ：小さい。



\* 道北・道央（宗谷～後志）、道南・津軽（渡島、檜山、青森県）、本州北部日本海（秋田県～石川県）、西部日本海（福井県～長崎県）、沖合域（日本海中央部）。

\*\* 近年平均は最近5年間（2006年～2010年）の平均を示す。

## I 予報の説明

2011年6月までの漁況の経過、6月中旬～7月上旬に実施した日本海スルメイカ漁場一斉調査の結果、および冬季発生系群を主体とした太平洋での分布状況（平成23年度 第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報）を主要な情報として今期の各海域における漁況を以下の通りに予測した。

### 1. 道北・道央（小型いか釣り）

道北・道央海域では通常、7月～8月と11月に漁獲量のピークがある。前半は秋季発生系群が主対象であり、後半は冬季発生系群が主な漁獲対象となる。

漁場一斉調査結果では、今年の当海域への来遊尾数は昨年および近年平均を上回ったものの、小型の個体が多かった。今年6月の漁獲量は昨年および近年平均を下回った。

今期の漁況は、当海域への来遊尾数が昨年および近年平均を上回ったことから、昨年を上回り、近年平均並みと予想される。ただし、小型の個体が多く、今年6月の漁獲量は昨年および近年平均を下回ったことから、8月までの漁況は昨年および近年平均を下回り、魚体は小さい見込み。

### 2. 道南・津軽（小型いか釣り）

道南・津軽海域では例年7月が漁期のピークで、太平洋側からの来遊群によって11月～12月にもう一つの小さなピークが出来る場合がある。近年、6月～8月の漁獲量は減少傾向にある。

漁場一斉調査結果では、今年の当海域への来遊尾数は昨年並みであったものの、小型の個体が多かった。また、今年6月までの漁獲量は昨年および近年平均を下回った。

今期の漁況は、当海域への来遊尾数が昨年並みであったことから、昨年並みで、近年平均を下回ると予想される。ただし、小型の個体が多く、今年6月までの漁獲量は昨年および近年平均を下回ったことから、8月までは昨年および近年平均を下回る。なお、11月～12月にも漁期のピークが見られる見込み。

### 3. 本州北部日本海（小型いか釣り）

本州北部日本海では漁期の中心は5月～7月であり、近年は8月以降にこの海域での活発な漁場形成は見られていない。

漁場一斉調査結果では、当海域への来遊尾数は昨年および近年平均を下回った。さらに、魚群の北上の遅れによって漁期開始が遅れ、5月～6月の漁獲量は昨年および近年平均を下回った。

これまでの魚群の北上の遅れにより、8月の漁況は昨年および近年平均を上回ることが予想されるものの、その後は活発な漁場形成はなく、昨年および近年平均並みの見込み。

### 4. 西部日本海（小型いか釣り）

予報対象期間の西部日本海では、10月以降に主に沖合から南下する群が漁獲の主対象となる。

漁場一斉調査結果では、2011年の日本海への来遊尾数は昨年および近年平均を上回ったものの、小型の個体が多かった。当海域の今年5月の漁獲量は昨年を上回り、近年平均並みであったが、6月は下回った。

今期の漁況は、日本海への来遊尾数が昨年および近年平均よりも多かったことから昨年を上回り、近年平均並みと予想される。ただし、小型の個体が多かったことから10月までは昨年および近年を下回る見込み。

## 5. 沖合域（いか釣り）

沖合域では大和堆付近が主漁場であり、8月下旬～9月以降には北海道沖および太平洋側からの来遊群によって武蔵堆付近も漁場となる。

今年の漁場一斉調査結果では、大和堆付近での来遊尾数は昨年および近年平均を下回り、昨年よりも小型の個体が多かった。一方、道央・道北では小型の個体が多かったものの、昨年および近年平均よりも来遊尾数が多かった。

今期の漁況は、大和堆付近での来遊尾数は昨年および近年平均を下回ったことから、8月の大和堆付近では昨年及び近年平均を下回る。しかし、道央・道北では小型の個体の来遊尾数が多かったことから、9月以降は近年平均並みの漁況となる見込み。

## II 予報に用いた主要な情報および調査結果

### 1. 漁場一斉調査結果

#### 1) 分布状況

日本海におけるスルメイカ（秋季発生系群）の分布状況を日本海漁場一斉調査（6月下旬～7月上旬に実施）によって調べた。調査結果の概要は以下の通りであった（図1）。

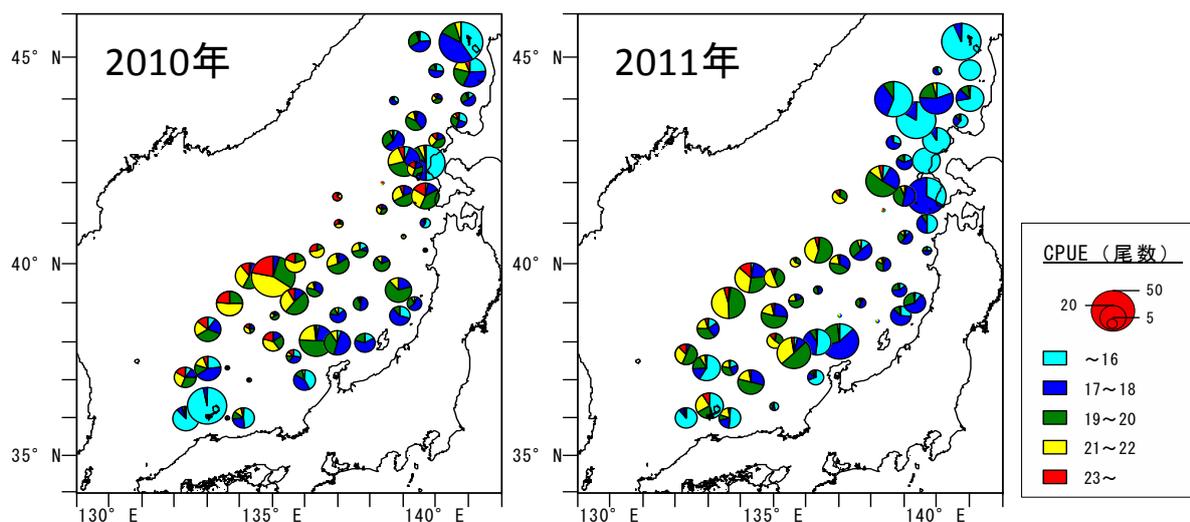


図1 日本海におけるスルメイカの分布状況

図中●の面積は各調査点の分布密度の指標となるCPUE（釣機1台1時間あたりの採集尾数）を示し、各色は各外套背長範囲(cm)の比率を示す。

- (1) 道北・道央海域では、CPUE（釣機1台1時間あたりの採集尾数）が20尾～50尾の分布密度が比較的高い調査点が多くあった。しかし、外套背長16cm未満の小型の個体がほとんどであった。
- (2) 道南・津軽海域では、昨年同様CPUEが5尾～20尾の調査点が多かったが、昨年と比較して小型の個体の比率が高かった。
- (3) 本州北部では、能登半島付近にCPUEが20尾～50尾の比較的高い分布密度が高い調査点があった。しかし、昨年と比較して小型の個体の比率が高かった。
- (4) 西部日本海では、CPUEが5尾～20尾の調査点が多かった。他の海域と異なり、外套背長16cm

未満の小型の個体の比率が昨年よりも低かった。

(5) 沖合域では、大和堆を中心に CPUE が 20 尾～50 尾の分布密度が比較的高い調査点が複数あったものの、外套背長 23cm 以上の大型の個体の比率は昨年より低かった。

## 2) 資源水準

日本海漁場一斉調査において、釣獲試験を行った全調査点の平均 CPUE を日本海におけるスルメイカ（秋季発生系群）の資源量指数とした。資源量指数は、1970 年代と 1980 年代は減少傾向にあり、概ね中位～低位水準であったが、1990 年代は増加傾向となり、中位～高位水準になった（図 2）。2002 年（25.04 尾）に資源量指数は最も高くなったが、2003 年～2007 年（概ね 10 尾～15 尾）にやや低下した。2011 年の資源量指数は 16.59 尾であり、昨年（14.59 尾）を上回り、概ね近年平均（16.17 尾）並みであった。

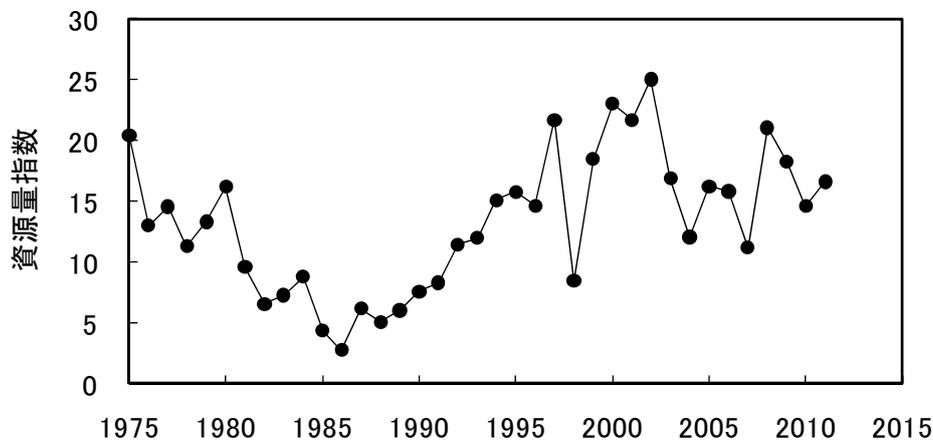


図 2 日本海におけるスルメイカ（秋季発生系群）の資源量指数の変化

## 3) 魚体の大きさ

資源量指数で重み付けした外套背長組成を図 3 に示す。2011 年は 16cm 台にモードがあり、昨年（20cm 台にモード）及び近年平均（19cm 台にモード）よりも小型の個体が多かった。一方、外套背長 20cm 台以上のスルメイカの資源量指数は、昨年および近年平均を下回り、大型の個体は少なかった。

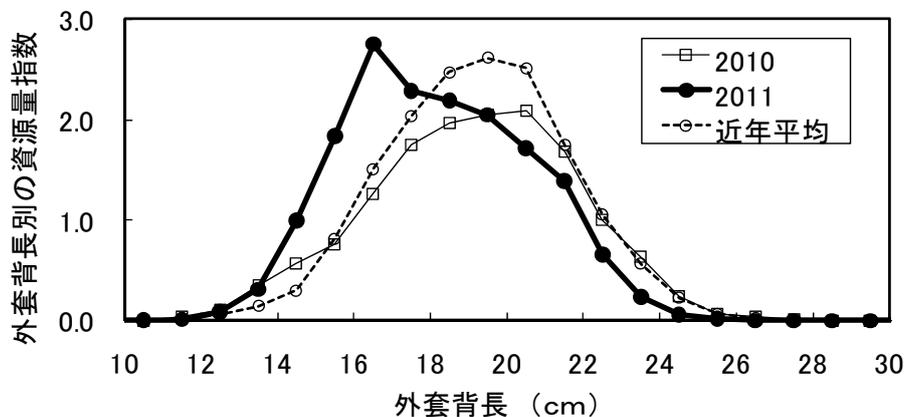


図 3 日本海漁場一斉調査結果による CPUE 重み付け平均体長組成  
各外套背長階級の値は釣機 1 台 1 時間あたりの平均採集尾数を示す。

## 2. 2011年6月までの漁況の経過

2011年6月までの各海域の月別漁獲量を図4に示す。3月までは冬季発生系群を漁獲対象として本州北部および西部日本海で近年平均を上回る漁獲量であった。5月以降は、水温上昇の遅れによって秋季発生系群の北上が遅れ、西部日本海では5月の漁獲量が近年平均並みであったのに対し、本州北部では5月の漁獲量は昨年および近年平均を下回った。6月も日本海全域で漁獲量が昨年および近年平均を下回る状況となっている。

## 3. 太平洋側（冬季発生系群）の分布状況

太平洋側には主にスルメイカ冬季発生系群が分布する。これらは10月以降、宗谷海峡および津軽海峡を經由して日本海に來遊する。そのため、太平洋側の冬季発生系群の分布状況は10月以降の日本海の漁況に深く関係する。

平成23年度第1回太平洋スルメイカ長期漁況予報によると、太平洋側では、來遊量が昨年を上回ると予測されている。

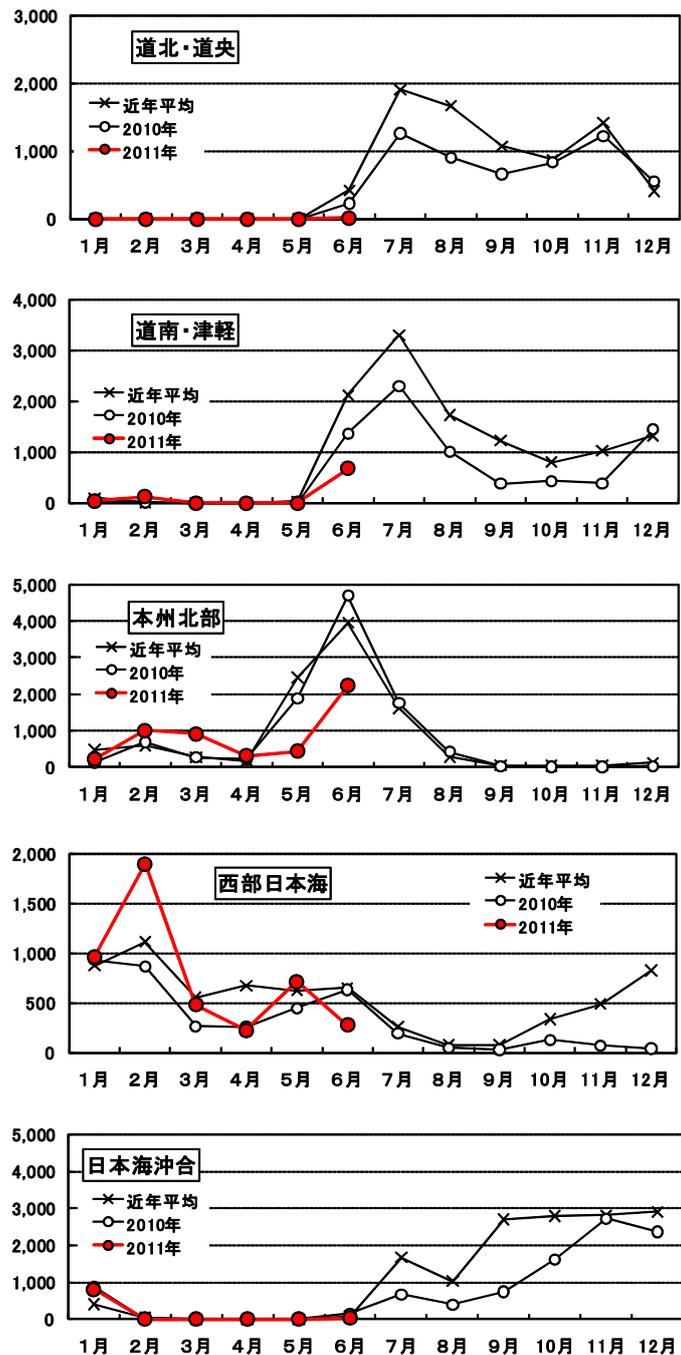


図4 日本海各海域のスルメイカの漁獲量（トン）  
各道府県試験研究機関および漁業情報サービスセンターの資料より作成（一部未集計）。日本海沖合は冷凍スルメイカ漁獲量。

## 参 画 機 関

<p>地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 中央水産試験場</p>	<p>兵庫県立農林水産技術総合センター 但馬水産技術センター</p>
<p>地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所</p>	<p>鳥取県水産試験場</p> <p>島根県水産技術センター</p>
<p>秋田県農林水産技術センター 水産振興センター</p>	<p>山口県水産研究センター</p> <p>長崎県総合水産試験場</p>
<p>山形県水産試験場</p>	<p>社団法人 漁業情報サービスセンター</p>
<p>新潟県水産海洋研究所</p>	<p>水産庁 増殖推進部 漁場資源課</p>
<p>富山県農林水産総合技術センター 水産研究所</p>	<p>独立行政法人 水産総合研究センター 北海道区水産研究所 東北区水産研究所</p>
<p>石川県水産総合センター</p>	<p>(取りまとめ機関)</p>
<p>福井県水産試験場</p>	<p>独立行政法人 水産総合研究センター 日本海区水産研究所</p>
<p>京都府農林水産技術センター 海洋センター</p>	